

なでしこジャパン

元女子ソフトボール日本代表監督
宇津木妙子

「テレビ、CMでハシヤいんでいると…」

サッカー女子日本代表の活躍のおかげで、暗いトネルの真っ只中にいた日本に光が差し込みました。これほどスポーツの力というものを感じたことはありません。

ただ、いまやマスコミに引張りだこ。CMやテレビ番組ではしゃいでいるなどしこたちを見ていると、一抹の不安を感じます。私自身が身をもって経験したのは銀メダルを獲ったソフトボール日本代表のシドニー五輪と、その後起きた苦しい出来事です。

ソフトボールは女子サッカー同様、ずっとマイナースポーツでした。シドニーでも最初はマスコミは来ませんでした。それが勝ち進んでいって決勝では、五十人くらいの報道陣が押しかけた。正直に、嬉しかった。どんな記事でもソフトボールという言葉が活字になるだけで有り難かった。しか

しそこで、監督である私も含めて勘違いしてしまった。

毎日のように取材が入る。大会を開くと物凄い数の人が来る。マスコミは常に付いてくる。追っかけファンも現れました。何十枚も色紙を持ってきて握手をすると手を引く張るような怖い人もいました。選手を守るために警備は厳重になって、ファンと選手の間にはロープが張られました。いままで誰にでもサインしていたのが、急にスター扱いになった。

テレビでも、よく取り上げられる選手とそうではない選手がいる。「なんであの子ばかり？」というやつかみも生まれました。シドニー以前、指導者は私だけという家族のようなチームでしたが、銀メダルを獲ったことで、関わりたい人がたくさん現れました。メンタルトレーナーとか、コー

チとか。女の子は弱いですから、そういう存在に頼る。「あの人はこういつていた」という逃げなんです。ベテラン選手は「そんな指導必要ない」という。ここでも溝が出来る。

そのなかで私も自分を見失ってしまいました。きちんと叱るべきところを、マスコミが来ている手前格好つけて指導が甘くなることもありました。そんな状態のまま「金しかない」とアテネ五輪に臨みました。チームはシドニー以前の緊張感に欠けて、合宿から怪我や熱を出すものもいた。自己管理が徹底していなかった。

初戦のオーストラリア戦で上野由岐子は熱を出したまま先発した。熱のせいで身体は軽くなっていました。ボールも軽い。四回で打ち込まれてスタートから躓きました。結果は銅メダルに終わりました。私はよく

言うんです。「シドニーから帰ってきたら親戚が増えました。アテネから帰ってきたら親戚が減りました」みんないい時は寄ってくる。結果が出ないと見向きもされなくなる。その反省と挫折が北京五輪の金メダルに繋がったと思います。

ロンドン五輪で最もメダルが期待されているのはなでしこジャパンでしょう。澤穂希選手や佐々木則夫監督はこれまでの苦労もあって、冷静だとは思いますが、若い選手はまた別です。いままでは澤選手の背中だけ見て走っていたのが、いまはどこかで個々が自立し始めている。

ただ選手を締められるか。いままででない重圧もかかる。対戦相手は日本対策を徹底してくるでしょう。でもどうか頑張ってください。ソフトボールは種目から外されてしまったので、すごく羨ましい。心のどこかで悔しい気持ちもある。だから私たちが出られない分まで、これからは切り替えて、是非とも金メダルを獲ってほしい。期待と同時に見守りたいと思います。

CM製作会見でのなでしこジャパン

